

茶室覚書

小庵 京都 表千家 1832
十畳+上段二畳 ざんげついで

残月亭

外観：棧瓦葺き、切妻造りの妻を南面 柿葺の庇の土間庇
深い軒は支柱無しで腕木で桁を支えた、竹木舞けらば
足元は透かして竹を 三本通して軽快なたたずまい
床：二畳の上段が出床をなす 床框は丸太で蹴込板
上段角の大閣柱は松の四方柱 細い方を正面
天井：上段は桐板、中央に棹を入れる野丸太 高さ5.66尺と
低い 床前二畳の上を化粧屋根裏
付書院：上段との境は、茶室内の唯一の北山杉

- ・小庵が千家の再興に際し利休の聚楽屋にあった色付九間書院の特徴を再現した茶室 床の間横の化粧屋天井の突上窓から秀吉が月を愛でたといわれ、残月亭の席名のゆえんとなる
- ・南面は土間庇で、一間半に腰高障子四本建で露地に面す
- ・内部は上中下段の構成で、長押なく天井も低く、化粧屋根裏を組入れるなど、書院造りのいかめしさを抑えている
- ・床の正面は三枚障子の中敷居窓、腰に柱板を張る
- ・西面に樽縁くれえんを配し、西日除けの中敷居窓（写真無し）

